現代日本社会の「ジェンダー秩序」における宗教の位置

猪瀬　優理
龍谷大学社会学部教授

家父長制的ジェンダー秩序と宗教

現代日本社会における宗教は「ジェンダー秩序」の観点からみると、どのような位置にあるのか。この問いについて筆者がこれまで書いてきた論考をもとに検討したい。

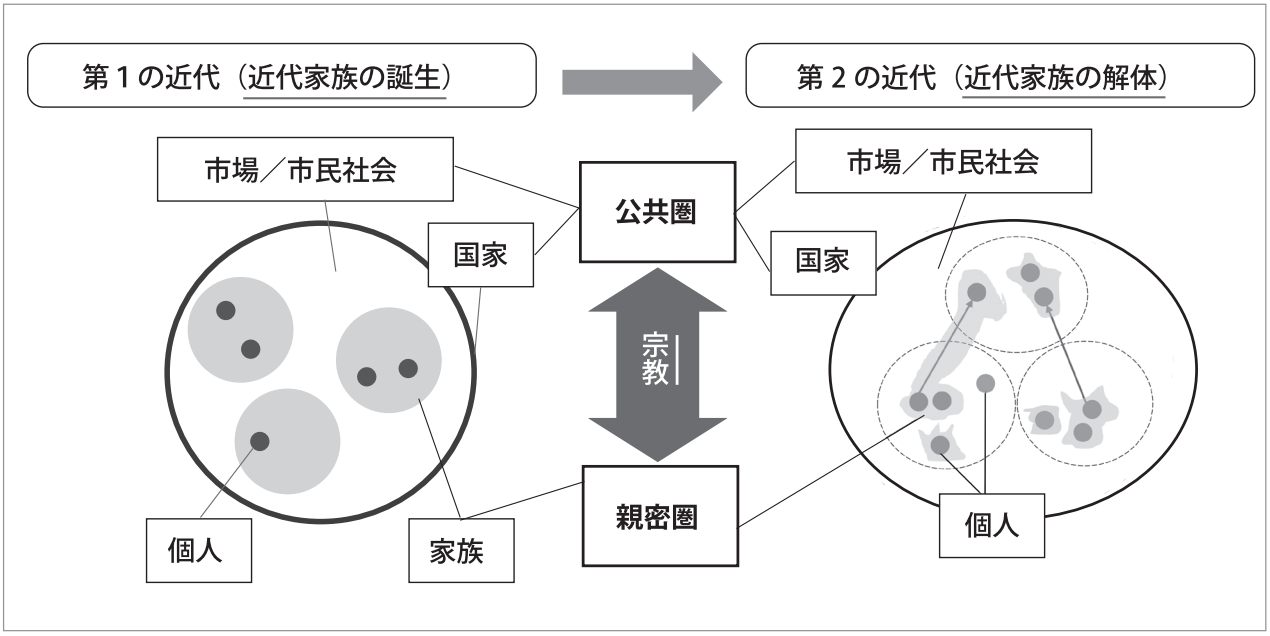
宗教は家父長制批判の立場に立つフェミニズムから見ると、そのジェンダー秩序を正当化し、維持・強化する筆頭の存在である。宗教は性別二分法・異性愛主義・性別役割分業・男性優位などを前提としたジェンダー秩序を聖なるものとして提示している場合が多い。そのため「ジェンダー視点の備わる宗教研究への次の一歩」を目指した論集の「あとがき」においても、「まだまだ宗教学の領域でジェンダーの視点の重要性が認識されているとは言い難いのが現状である」と評されていた（川橋・小松編2016:219）。

いのせ　ゆり
北海道大学大学院文学研究科博士課程修了。行動科学（博士）。専門は宗教社会学。北海道大学大学院文学研究科助教、龍谷大学社会学部講師、同准教授を経て、現職。
著書に『信仰はどのように継承されるか―創価学会にみる次世代育成』（北海道大学出版会、2011年）、『近代日本宗教史第5巻　敗戦から高度成長へ　敗戦～昭和中期』（共著、春秋社、2021年）、『創価学会―政治宗教の成功と隘路』（編共著、法藏館、2023年）など。

一方、近年編纂された宗教学の教科書や叢書においては「ジェンダー」をテーマとした章が設けられるようになっており、筆者が執筆を担当しているものもある（猪瀬2021，2023など）。このうち猪瀬（2023）では、フェミニズムによる家父長制批判を確認した上、宗教集団が作り出し、維持してきた「ジェンダー秩序」において形成される関係性の特徴を次のようにまとめた。

> 家父長制的ジェンダー秩序のなかにいる女性は、教団やそこに属する家族の食事や掃除、構成員の心身の健康への配慮、構成員に傷病等が発生すれば看護や介護、構成員の生命を支えるためのケアの担い手となる。セクシュアリティや生殖（リプロダクション）に関しては異性愛主義を強調した上で、生殖に関して女性が決定する権利を奪う。人工妊娠中絶の禁止もこの一環である。そして、「従属する者」として社会的に配置された「女性」は「指導する者」として社会的に配置された「男性」のために、後継ぎとなる子どもを産み育てる。一方で、家族などの社会集団において主導的立場を取る「男性」は、女性や子どもなど従属的な立場にいる対象に対して、多くの場合当人の意志や主体性を軽視した保護的かつ支配的・介入的な「配慮」を提供する一方で、「女性」から自らと次世代の構成員の生命や情緒の維持に必要不可欠な直接的・対人的ケアを受ける（猪瀬2023:200-201）。

図1　親密圏と公共圏の再編成と宗教



（出所）落合2023:41をもとに下線・傍線部筆者追記

家父長制的ジェンダー秩序を正当化することは、次世代の担い手を含めた集団の構成員の維持・再生産を可能にする宗教集団の仕組みである。しかし、家父長制的ジェンダー秩序の正当化によって構成員の維持・再生産を試みているのは宗教集団だけではない。

現在、日本社会では「少子化対策」の政策的必要性を求める声が喧しいが、「国難」としてこの問題を捉えようとするのならば、いくら穏当にみえる語句を用いてみたところで、「女性」を「産む機械」かのように捉える視点からの距離はそう遠くない。

その秩序を極端に乱さない限りは家父長制的ジェンダー秩序に当てはまらない生き方も可能だが、不利益を被る可能性も高い。秩序を乱すか否かの判定基準は、リプロダクションやセクシュアリティに関わる諸制度や選択的夫婦別姓制度など、折に触れて論点として提示され、何十年と継続して実現と改善の声があげられているにもかかわらず、その進展や改善が著しく妨げられているような案件の近くにあるかもしれない。この判定基準の形成・正当化・維持にも宗教は大きな力を発揮する(山口・斉藤2023)。

親密圏と公共圏をつなぐ宗教

家父長制的ジェンダー秩序のもとではケアの第一義的責任は「家族」にあるとされ、不可視化・無償化されてきた。しかし、家族におけるケア労働は人びとの生命と生活と人生を維持・再生産するために不可欠である。フェミニズムは、家父長制的ジェンダー秩序のもとで生じている不平等・不公正を是正しようとする挑戦だが、そのためには社会の再編成が必要とされる。

落合恵美子は、「人が生きること」についての社会理論、生命／生活の社会科学を考察するために、近代社会を〈家族・市民社会・国家〉の三層構造として捉え、「第一の近代」における〈政治・経済・社会の三つの公共圏〉との重なりと揺らぎから「第二の近代」への移行を説明し、「親密圏と公共圏の再編成の理論」を構築しようとしている（落合2023:41）。落合が示した近代の三層構造の変容をとらえた模式図の中に「宗教」がどこに位置づくかを示したものが**図1**である。

親密圏と公共圏を相互につなぐ矢印の中に宗教を配置したこの図が、本稿の「問い」への「答え」

になる。

政教分離の原則を持つ近代社会では宗教は私的領域にあるものとされる。しかし、現代日本では、創価学会が生み出し支持している公明党が政権与党に長らく位置しており、日本会議や旧統一教会との関連から政治と宗教との深い関係も広く明らかになった。宗教は公的領域における一定の影響力を持ちうるし、現に持っている存在である。

近代国家に政教分離の原則があるのは、国家的な権力と宗教的権力の密接な結びつきが、人びとの生活と人生と生命におけるウェルビーイングを大きく損なってきた事実があるからであり、その影響を軽減するため分離しようとする基本姿勢が必要なのである。しかし、宗教は人びとのウェルビーイングを損なう方向への影響力を持ちうることから、国家的権力が宗教に全く関与や関心を持たないことも、宗教的権力による暴力的な人びとの生命・生活・人生への関与を見過ごすことになる。

なぜ、宗教は人びとに大きな影響を与えることができるのか。「宗教」が「公共圏」と「親密圏」をつなぐ働きを持つ、とみることが一つの説明である。一人ひとりの人間は「社会」に所属し、その一員であることを自覚しながら、その中での自身の生き方を模索している。しかし、いきなり「国家」のような巨大な社会と個人が接続することは難しい。多くの場合、その人が所属する「家族」や「地域社会」などの中間集団や、学校教育、メディア等で見聞きする情報の中で「社会」を認識し、その価値観やその中でのふるまい方を身につけていく。中間集団のなかでも「宗教集団」は世界をとらえる「教え」とそれを体現する「儀礼」、それらを共有・維持する「仲間集団」を兼ね備えているため、価値や生き方の提供と維持においては非常に力を持っている。

教えが及ぶ影響範囲は、理念的には一つの地域社会、一国の範囲、地球全体を超えて宇宙全体、時空を超える可能性にまで及びうる。宗教集団は、意味と象徴とそれらを共有する仲間を通して、個人や家族が営む「親密圏」を市民社会と国家が形成する「公共圏」へとつなぐことができる。逆に、この部分の相互作用過程において「宗教」は、「公共圏」へと一人ひとりの人をつなぐ働きを阻害したり歪めたりする働きをすることもできる。宗教集団への囲い込み、家族への囲い込みを促進するような教団はこの例である。

2022年7月の事件以降、「宗教2世」の抱える困難に着目が集まっているが（塚田・鈴木・藤倉2023など）、これは親密圏と公共圏とのつながりが宗教によって歪められた結果として生じる問題の具体例といえる。

「宗教2世」ドラマに見るジェンダー秩序の反映

江原由美子は「ジェンダー秩序」を「「男らしさ」「女らしさ」という意味でのジェンダーと、男女間の権力関係である「性支配」を、同時に産出していく社会的実践のパターンを意味する」ものとしている（江原2021:14）。しかし、この定義は既存の「性の二分法」と「性支配」の存在を前提とした説明でもある。

これに対して、猪瀬（2023）では「ジェンダー秩序」を「人びとをいくつかの性カテゴリに分類し、その人が分類された性カテゴリに適切だとその社会が認める性に関わる規範を作り出すと同時に、その性カテゴリの間に一定の関係性を作り出す社会的実践のパターン」と定義した。つまり、定義自体においては、性別は二つのみに限定せず、性カテゴリ間に生じる関係性も支配の関係に限定しない、ということである。

このように定義することにより、つぶさにジェンダー秩序の表れを観察すれば、実際に観察可能な私たちの「社会」が維持・形成しているジェンダー秩序の根幹に、「性は男と女の二つ」といった排他的な「性の二分法」があり、二つの性の間に「男は主、女は従」といった「支配と従属の権力関係」があることを一定の距離感を保って確認することができる。

しかし、家父長制的ジェンダー秩序は非常に強固で、ここから逃れることは容易ではない。

この点を宗教とジェンダーの観点から改めて確認する機会となった最近の事例として、2023年11月3日にNHKスペシャルが「シリーズ”宗教2

世”」の枠組みのなかで制作・配信したドラマ「神の子はつぶやく」の表現があった。

このドラマは多くの「当事者」である「宗教２世」とその家族に取材して制作された。SNS等の感想を見てみると、「宗教２世」当事者とみられる人びとからは、「丁寧に取材したうえ、自分たちの経験を練度の高い演者たちがそのままに表現してくれた」といった方向で評価されている場合が多いようにみえる。

一方で、ジェンダー秩序のあり方を問う視点から見ると、このドラマの表現には、現状の不公正・不平等なジェンダー秩序を無批判に美化して表現している側面があり、教団から離れようとして不安定な状態にある「宗教２世」（女性はもちろん、おそらく男性も）が世俗社会で更なる被害を受けるリスクを高める懸念を持った。

このドラマでは主導的・自律的で有利な立場にある「男性」が、従順・自責的で不利な立場に立たされた「女性」を〈救う〉という、「男性」主導型のジェンダー秩序を確認する表現が反復されていた。

この秩序の表現が現れているところについて書き出してみると以下のとおりである。

主人公は女性の高校生である。その母親は父親と結婚する前、職場での仕事や人間関係で困難を抱え、家族との縁も薄い。男性上司に「生きてる資格がない」と怒鳴られ落ち込んでいた時に、のちに主人公の父親となる男性に出会い、〈救われた〉とみえる経緯で結婚する。しかし、この男性は兄の連帯保証人となった件で多額の借金を背負っており、夫婦は経済的に困窮する。母親は女性主人公の幼少期より自分に似て不器用な娘の育児にも悩む。この中で２人目の子どもを妊娠し、産んでいいのか絶望していた時に、女性の小学校時の同級生の夫である男性説教師の説教に感銘を受けて〈救われた〉と感じ信仰の道を歩む。高校生となった女性主人公は母親の信仰活動のため学校で孤立しているが、幼馴染である説教師夫妻の息子は部活に参加できており孤立していないため、女性主人公に楽しみを知って欲しいとカラオケに連れ出す。つかの間の〈救い〉のようにも見えたが、母親に見つかって叱責される。男性幼馴染は、礼拝の為に修学旅行に行けない女性主人公を〈救う〉ため、教員に一日早く２人で帰宅できないか交渉を持ちかける。一旦は聞き入れなかった男性教員が意を決し女性主人公を〈救おう〉と母親に直談判するも、母親が激昂して逆に高校を辞めさせると宣言し、そのような母親を「ヤバい」と評した男性教員の言葉に女性主人公はショックを受ける。父親は問題の原因でもあるが、女性主人公が父親から励ましの言葉を受ける場面や、父親が妻と娘たちを水族館に連れて行き、つかの間の〈救い〉を感じるシーンもある。そして、父親が瀕死となった際、母親が病院で父親に付き添うのではなく教会で神様に〈救い〉を求めて祈りをささげていたことによって、父親の死に目に会えなかった女性主人公がショックを受けて家出をする。家出先の街頭で出会った男性の紹介で夜の店で働くことができ〈救われる〉が「自分でガードできない。危なっかしい」などの評価を受ける。その後、男性緊縛師と出会い、縄で縛られて「許されない罪を犯しました」といい、男性緊縛師からその胸の中で「許す」「よくここまで生きていた」といわれ、つかの間の〈救い〉を得る。女性主人公の妹が、神様への愛が足りなかったから、父が死に家族がバラバラになってしまった、自分が悪かったと自責の言葉とともに教会で信仰告白するシーンもある。女性主人公は、縄で縛られるだけではなく、男性幼馴染からキスをされ、働く店を紹介した男性から性行為をされた後と思われる場面もある。この男性がベッドの中で泣いている女性主人公を背に口にする「えらいもんをひろっちったな」というセリフは印象的であった。

このドラマでは、「女性」が社会の中で劣位に置かれ、育児や家庭運営の責任を背負い込むことで、追い詰められ〈救い〉を求める状態になること、「社会」の中でこの苦難に〈救い〉を与えようとする存在は非常に限られていて、時に〈救い〉の姿を借りた「男性支配」に取り込まれ、搾取されていくことがつぶさに表現されている。

一方で、このドラマは、「“宗教２世”たちの言葉に耳を傾ける」ことを主眼として、これまで「見過

ごされてきた」ことをとらえ、伝えることを目的とした「シリーズ”宗教２世”」の一作品として制作・配信されている（NHK 2023）。そうであるなら、「宗教２世の経験」を「男性」中心主義的なジェンダー秩序の中で「女性」が翻弄され搾取される「そのまま」の姿を後追いする表現に終始するのではなく、「社会」の側が「何を見過ごしてきたのか」を問う姿勢をより鮮明に表現する必要があったのではないだろうか。しかし、それはなされなかったように思われる。

何を見過ごしてきたのかを問うには、一定程度ジェンダー秩序の外側に立って、その内部に構築されている秩序を読み解こうとする姿勢、試みがなされる必要がある。ドラマ制作者はその立場には、立つことができなかったのだろう。

このドラマの表現が「当事者」の視点からみた「社会」を描こうとした結果であるのなら、現代社会にある家父長制的ジェンダー秩序のもたらす影響の根深さが鏡のように映し出された事例とみることもできる。

伝統的な宗教が戦後になっても女性蔑視的な価値観と性別役割分業意識を更新できずに保守性を残存させている傾向が強かったゆえに、「家族の戦後体制」を支持する新たなジェンダー秩序を提示できた新宗教に一定の需要が生まれた面がある（猪瀬2021）。しかし、新宗教におけるジェンダー秩序もまた、女性たちを信仰の名のもとに「母」「妻」「嫁」「主婦」などの女性役割に封じ込め、「女性」のみをケアの担い手とみるものである（猪瀬2019）。

「男は公共領域・女は家内領域」とする性別役割分業を前提とする「家族」を基礎単位として形成された「近代国家」のジェンダー秩序のなかに「男性」も「女性」も組み込まれている。現代社会に生じている少なからぬ歪みと苦しみが、このジェンダー秩序から生み出されていることを、見過ごさずに見ようとすることが必要なのではないだろうか。■

《引用・参照文献》

江原由美子（2021）『ジェンダー秩序〔新装版〕』勁草書房

猪瀬優理（2019）「新宗教におけるジェンダー：信仰体験談と生命主義的救済観（特集 ジェンダーとセクシュアリティ）」『宗教研究』93(2)，213-240

猪瀬優理（2021）「第５章　戦後の宗教とジェンダー」島薗進・末木文美士・大谷栄一・西村明編『近代日本宗教史第５巻　敗戦から高度成長へ　敗戦～昭和中期』春秋社，141-169

猪瀬優理（2023）「第12章　宗教とジェンダー―変わりゆく社会における宗教の役割」伊原木大祐，竹内綱史，古荘匡義 編,『3STEP シリーズ　宗教学』昭和堂，193-206

川橋範子・小松加代子編 (2016)『宗教とジェンダーのポリティクス―フェミニスト人類学のまなざし』昭和堂

NHK（2023）「シリーズ“宗教２世”ドキュメント“宗教２世”を生きる」『NHK スペシャル』https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/episode/te/7PVRP2G9K9/（2023.11.08）

落合恵美子（2023）『親密圏と公共圏の社会学―ケアの20世紀体制を超えて』有斐閣

塚田穂高・鈴木エイト・藤倉善郎（2023）『だから知って欲しい「宗教２世」問題』筑摩書房

山口智美・斉藤正美，ポリタスTV 編（2023）『宗教右派とフェミニズム』青弓社